

付けるように、現在も、現存する土塀を境に調査区を含めた陵前域は天竜寺の境内より一段高くなっている。

2 遺物(第24図)

今回の調査で出土した遺物は瓦のみである。1と4が瓦積みを構成していたもので、2と3は瓦積みの直上で検出したものである。

1は丸瓦である。大半を欠損している。破片2点を接合しているが、それぞれは若干離れた所で用いられており、同一個体を割って瓦積みに使用したことがわかる。凸面は縄目叩きの後、強いナデ調整を施している。凹面には布目痕があり、その上を斜め方向に粗いハケメで調整を行う。2は、1と同一個体の可能性がある丸瓦の玉縁連結部破片である。調整は1と同様である。3・4は平瓦の破片である。両者とも須恵質で堅緻な焼き上がりが特徴である。しかし、焼成・色調・調整方法等は類似するが、ハケメの調整面が異なるので同一個体ではない。3は、凹面に斜め方向の粗いハケメ調整が施されている。凸面は、板ナデの後、指ナデ調整と思われる。瓦当面状の端面に沿って溝状の凹線が走るが、中には布目痕が認められる。4は3と凸面と凹面の調整が逆になっている。3・4の特徴に類似する破片は他にも見られるので、同様の瓦複数枚が割られて、瓦積みに用いられていたものと思われる。

まとめ

土塀の基礎と考えられる石組みを検出したが、現在確認できるもっとも古い明治14年の工事の平面図には、今回検出した石組みに伴う土塀は描かれておらず、同年以前には、既に取り壊されていた土塀に伴う基礎であることがわかる。昭和4年と同30年の陵基地形図においても、それぞれ土塀が造り替えられており、基本的には従来の区画を踏襲しつつも、現在の陵基地が確定するに至る過程の、微妙な境界の変更に伴い、その都度土塀が作り直された結果と考えられよう。

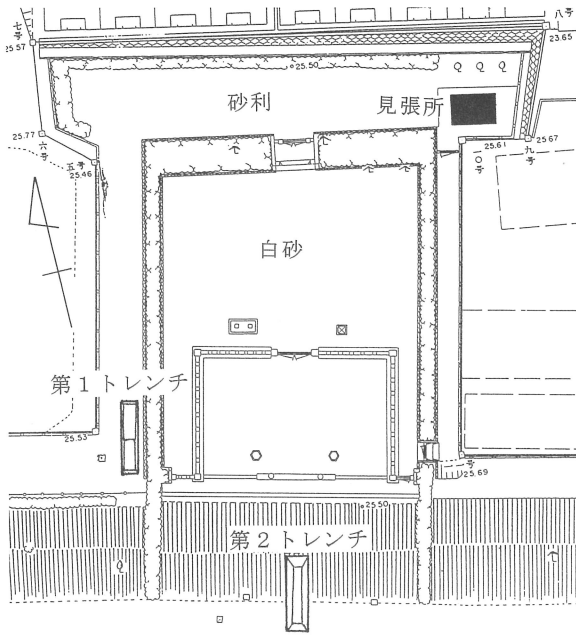
また、石組みと共に瓦積みを検出し、端面が揃うことから、この一連の石組みと瓦積みが、基礎と同時に石垣としての役割ももっていた可能性が考えられる。

なお、この石組みの構築時期であるが、中世期の様相の強い瓦を多く含んでいるものの、その時期を特定するのは困難である。

以上の結果を踏まえ、遺構は保存することとし、見張所の基礎は遺構を養生した上にベタ基礎を打設するように変更した。その他工事は予定通り施工した。(清喜裕二)

允恭天皇 恵我長野北陵防災工事箇所調査

第19代允恭天皇の恵我長野北陵は、藤井寺市国府1丁目に所在する前方部を北に向ける前方後円墳である。本陵拝所内にある石柵及び鳥居等には、地盤の不等沈下から生じたと思われる狂いが認められる。そのため平成11年度に防災整備工事が計画された。今回工法の検討と工事箇所における遺構・遺物の有無、地山の深度を確認することを目的として、平成11年1月25日から29日にかけて試掘調査を実施した。



第25図 恵我長野北陵調査箇所位置図(1/600)

掘削箇所は、拜所西側の参道に長さ4.8m、幅1.0mのトレンチと(第1トレンチ)、現外堤内法面(当陵は二重の周濠を有する前方後円墳であり、現外堤は本来の内堤にあたる。よって、以下内堤と表記する)に、長さ5.0m、幅1.5mのトレンチ(第2トレンチ)を設けた(第25図)。以下、掘削箇所の所見と出土遺物について報告する。

第1トレンチは、参道の表面に敷かれている砂利を除去した上で、重機による掘削を行った。掘削した結果、土層は次の通りである(第26図・図版6-1)。

I層 表土。参道に敷かれている砂利層と、参道を整備した際の整地土。

II層 盛土。黄褐色粘質土及び黒色礫混り土等からなる盛土層である。各層とも全く締まりのない土質である。この層から若干の埴輪片と陶磁器片が出土した。

III層 内堤構築土。均質な土層であり、非常に締まった土質を呈し、遺物も含まない。地山のようにも見えるが、細かく観察すると盛土の単位が観察できることから、本来の堤を構築した際の盛土であると判断した。

この土層の観察結果と、出土した磁器の存在から第1トレンチの南端から1m程は極めて新しい時期の盛土であると判断できる。また、この土層は真っ直ぐ拜所内に続くと考えられる。さらに石柵、鳥居などが傾いている箇所と一致することから、拜所内の構築物に傾きが生じている原因は、この締まりのない土層の上に造られているためと考えられる。III層はI層の直下であり、この間に埴輪片などを含む遺物包含層はなかった。また、II層との境で急激に下降することから既に人為的に削られている可能性が高いと考えられる。よって埴輪列などの遺構は、今回のトレンチ内では検出されなかった。II層でわずかに出土した埴輪も、表面がかなり摩耗した状態で出土している。

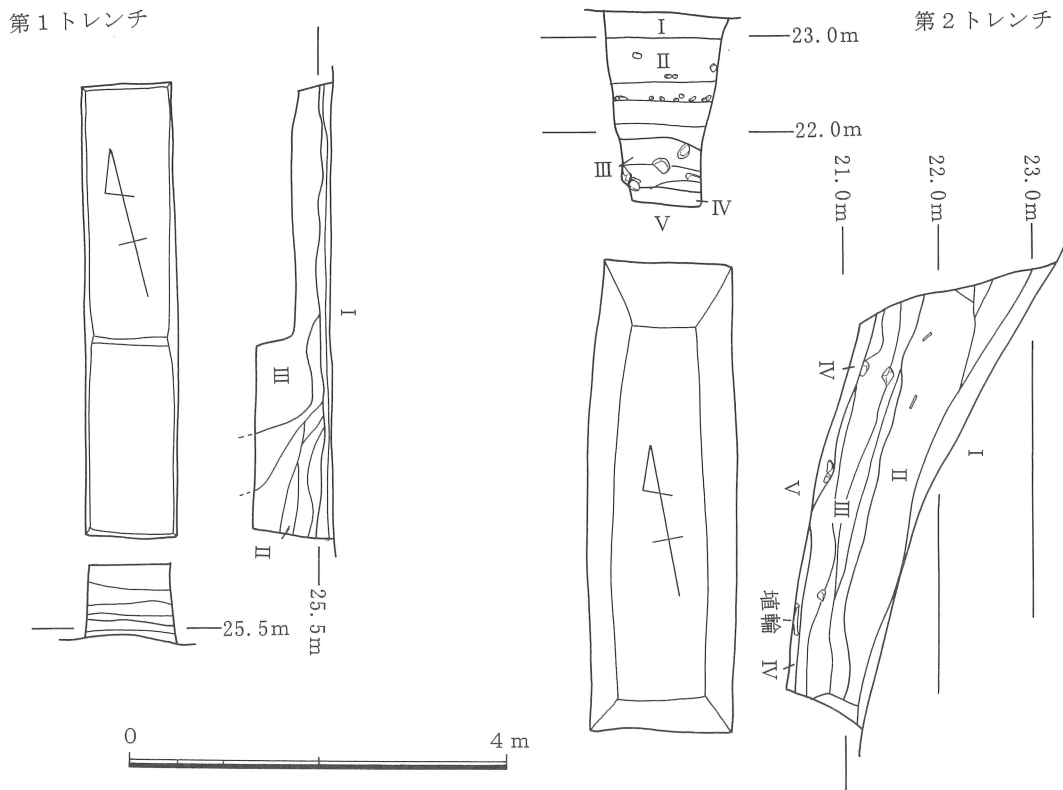
第2トレンチは、内堤の中腹から裾にかけて設定した。第2トレンチの土層は次の通りである(第26図・図版6-2)。

I層 表土。腐食土からなる現表土。

II層 現堤構築土。拳大の円礫を多量に含む厚さ50cm程度の礫層と、その上の明灰褐色砂質土からなる。礫層の中には多量の埴輪片を含む。

III層 崩落堆積土。全体に粘質の強い暗灰色土からなる。この層の中に薄く黒色粘質土層が2層確認でき、旧表土と考えられる。人頭大の石材と、II層出土の埴輪片より大形の破片が含まれる。

IV層 初期崩落土。地山の上に薄く堆積する土層であり、青灰色の粘質土である。大きな埴



第26図 恵我長野北陵調査箇所平面図および断面図(1/80)

輪片(蓋形埴輪)を含むことから、早い段階での崩落堆積土と考えられる。

V層 地山。暗青灰色砂質土であり、均質で硬い土層である。

この土層の観察結果から、現在の堤にはかなりの盛土がなされていることがわかる。特にII層の礫層は、多量の礫が堆積しており、人為的に短期間で盛られたと考えられる。しかしながら出土した遺物は埴輪のみであり、この盛土がなされた時期については不明である。出土した埴輪については、底部片が多く含まれていることから、築陵当初には、内堤の上に埴輪が並べられていたものと考えられる。III層には旧表土が確認され、II層の礫による盛土がなされるまでの濠底であったと考えられる。また、粘質土であることから滞水していた可能性もあろう。

葦石は検出されず、IV層とした土層に葦石に使用されていたと考えられる石材が散見されることから、本来の堤(内堤)裾は、現在の堤の下に包含されている可能性が高い。すなわち、本来の裾は現状より北側にあると考えられる。

出土した遺物は、合計310点である。大半が埴輪片であり、1トレンチから数点の磁器類が出土している。埴輪のうち、確認できた器種としては円筒埴輪、蓋形埴輪がある。円筒埴輪については、先述したように底部片が多く含まれており、堤の上に置かれていたものと考えられる。朝顔形埴輪については、確実にそれと判断できる個体は存在していない。

円筒埴輪の口縁部から順に見ていく。口縁部の破片としては2点が確認できた(第27図1・2)。2点とも端部から2cm程の幅を肥厚させている。折り曲げることによるものか、粘土帯を貼り付けたものか断面では観察しがたい。胴部の破片については13点を示した(第27図3~11、第28

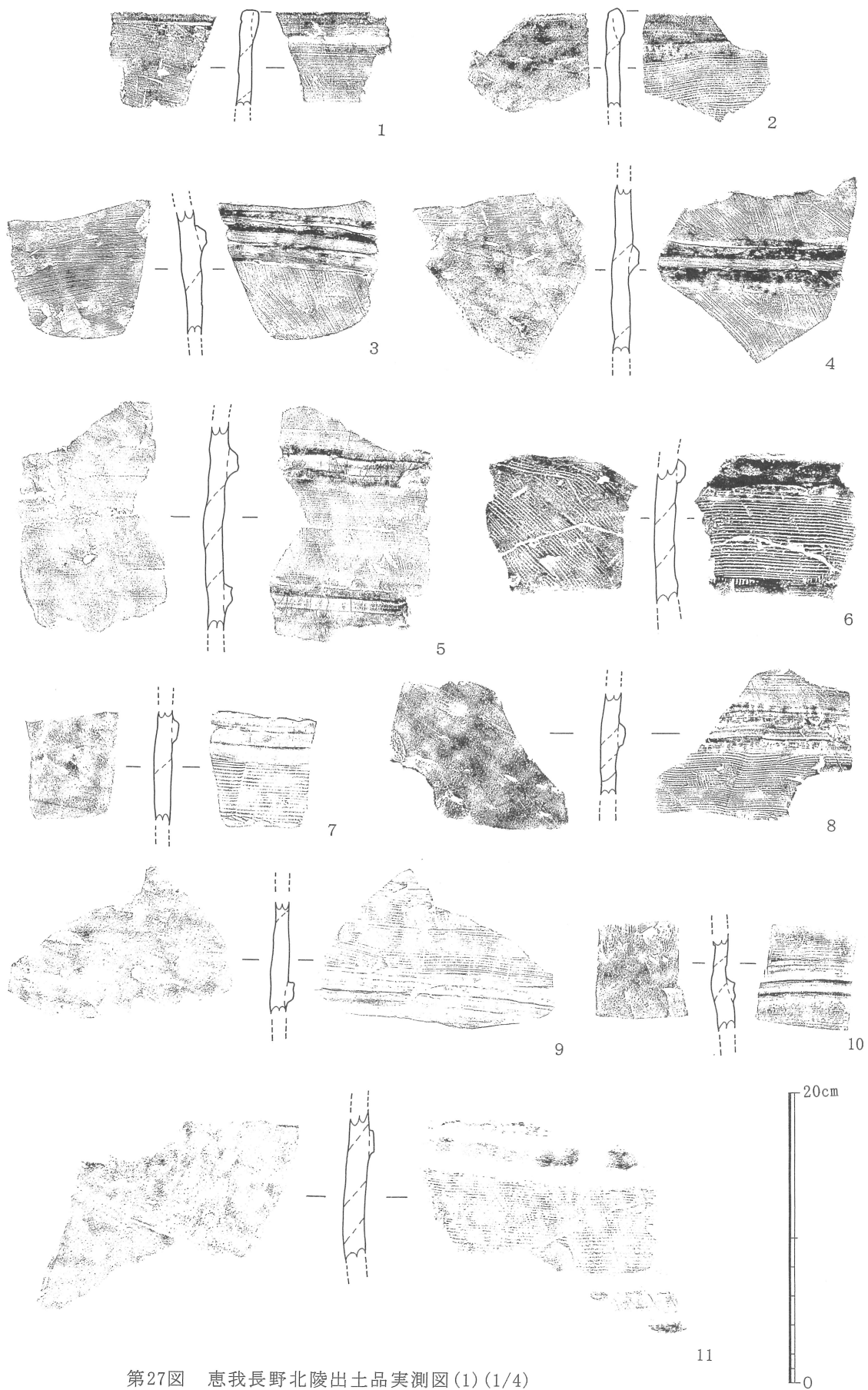
図12～15・図版6—3)。外面の調整は基本的に横ハケ調整が施されている。ハケの原体については1 cmあたり4～5条の粗いものと、8～9条の細かいものの少なくとも2種類が観察できる。ハケ調整については、斜めの停止痕を残すものと、全周を停止することなく施されているものがある。このハケ調整は、凸帯を貼り付ける以前に施していると判断される。凸帯間はおおよそ9 cmと一定しており、凸帯を貼り付ける位置はあらかじめ決めていたものと思われる。すなわち、1次調整として縦ハケを施した後に凸帯を貼り付け、2次調整として横ハケ調整を施したのではなく、1次調整としての縦ハケ調整は省略していることになる。内面の調整は、基本的に指ナゲ調整であるが、一部ハケによる調整も施されている個体がある。スカシ孔については、円形であることが確認できる。

底部については6個体を図示した(第28図16～21・図版6—4)。内3点については底径を復元したが、その数値は26～29 cmほどになる。最下段の凸帯までの高さはほぼ一定しており、先の胴部の状況と同様である。外面の調整については、3種類が確認された。基本的には下から上への縦ハケ調整が施される。このハケ原体についても目の粗いものと細かいものの2種類が存在する。次に16は指ナゲ調整のみが施されている。この個体については自重によって粘土紐が外側に大きくはみ出しており、他の底部片とはやや異質な感じを受ける。また21については、比較的目の細かい横ハケ調整が施されている。底部最下段の調整に横ハケ調整が用いられている個体としては唯一である。

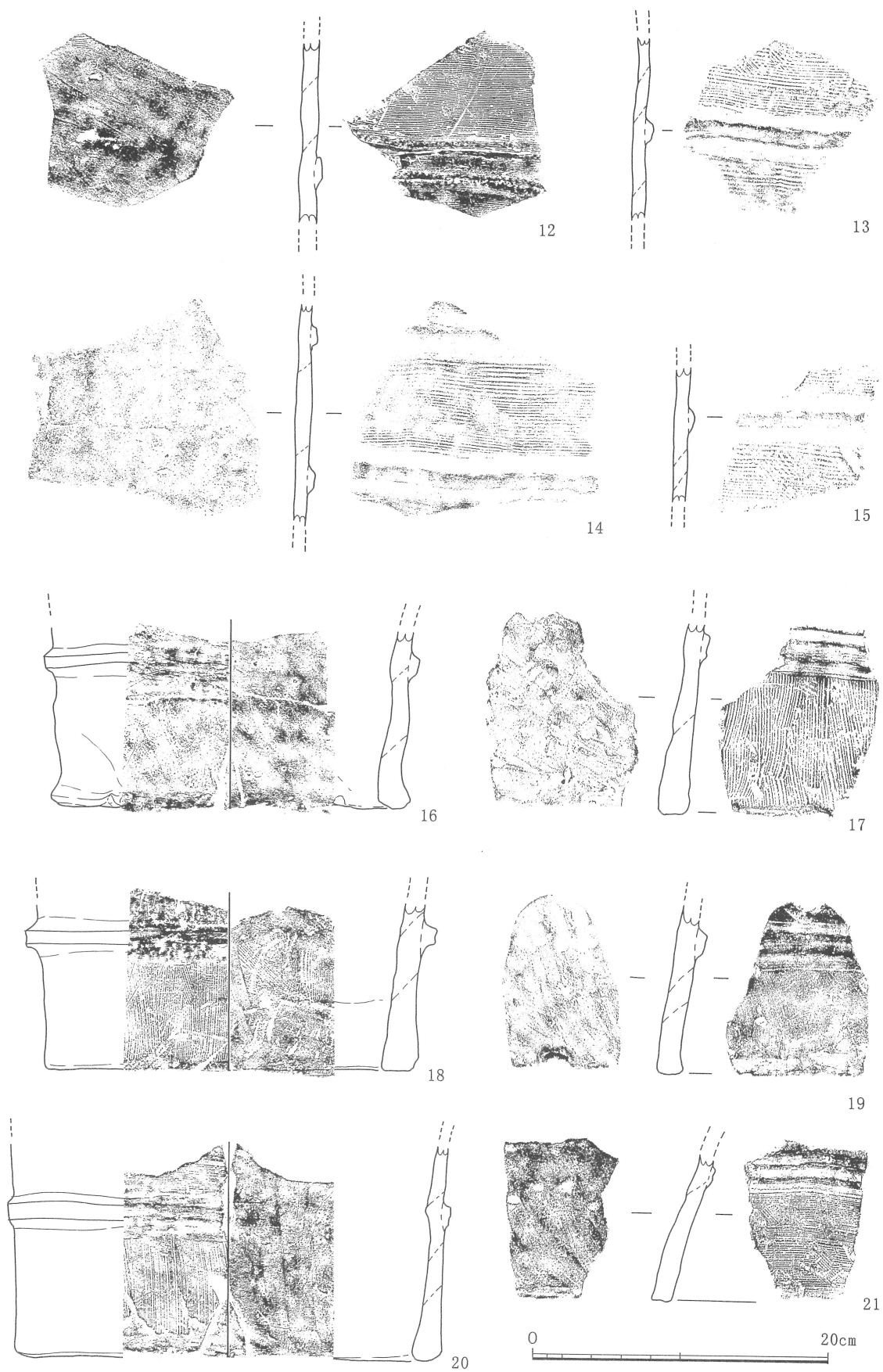
形象埴輪についてであるが、確認できた個体は蓋形埴輪のみである(第29図22～25)。比較的大きな破片が第2トレンチIV層から出土しており、蓋形埴輪も内堤に置かれていたものと思われる。この蓋形埴輪は、笠部および台部の破片のみが出土しており、調整方法や色調から3ないし4個体が確認できる。なお、立ち飾りと思われる破片は出土しなかった。

さて、蓋形埴輪は笠部先端の形状によって2型式に分けられる。そのうち第29図22(図版6—5)に示した個体は、端部から3 cmほどを下方に折り曲げている。その端部外面には3 cmほどの間隔で停止痕を残す横ハケ調整が文様として施されている。笠部上面には不定方向のハケ調整が施される。現存する範囲においては沈線は認められず、肋木の表現はなされていないと考えられる。この笠部の直径を復元するとおよそ60 cm程度になろう。もう一方の第29図23に示した個体は笠端部まで直線的に延びる形状を示す。その端部から4 cm程度の部分を2.5～3 cmほどの間隔で停止痕を残す横ハケ調整を文様として施している。その他の笠部上面はタテ方向のハケ調整が施され、やはり肋木の表現は認められない。なお、裏面には横方向のハケ調整が施されている。

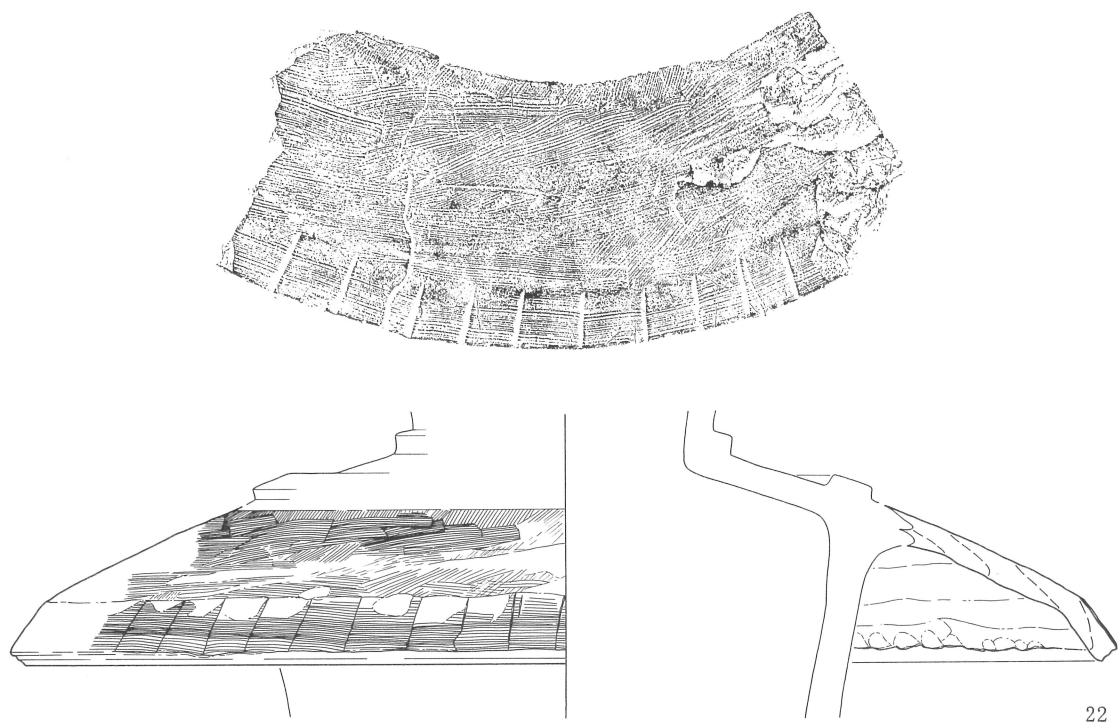
次に、第29図25(図版6—6)に示した個体では、台部と笠部の接合状況を観察することができる。すなわち台部の上端から3 cmほどに刻み目を施し、笠部との接合がより圧着できるような工夫を施している。この個体では笠部中央部凸帯が残されており、その面には3～4 cmほどの間隔で停止痕を残す横方向のハケ調整が文様として施されている。その他の笠上半部、下半部ともタテ方向のハケ調整が施されている。台部は補強のための粘土を貼り付けた痕跡をよく残しているが、ハケによる調整は施されていない。器厚は1 cm程度であり、笠部の重量を考えるとか



第27図 恵我長野北陵出土品実測図(1)(1/4)

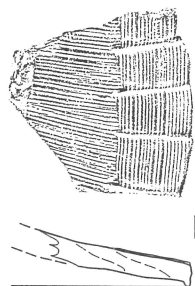


第28図 恵我長野北陵出土品実測図(2) (1/4)

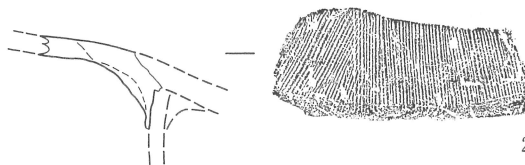


22

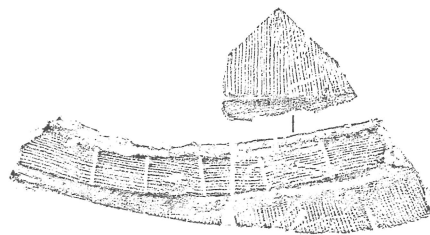
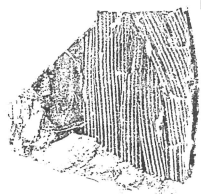
0 40cm



23



24



25

第29図 恵我長野北陵出土品実測図(3)(1/4)

なり薄いという印象を受ける。おそらく台部がかなり乾燥して強度を持った後に笠部の接合を行ったと考えられる。

以上の調査結果から次のようにまとめられる。現在の堤は南側に大きく盛土がなされ、その分内堤の幅は拡張されている。よって、本来の内堤斜面は今回の調査では検出されなかった。本工事にあたっては、遺構の存在する可能性が考えられることから、掘削を最小限とする工法を検討することとなった。

(徳田 誠志)

磐衝別命墓・磐城別王墓鳥居改築箇所の調査

垂仁天皇皇子磐衝別命及び皇孫磐城別王の両墓は石川県羽咋市川原町にあり、羽咋神社に隣接している(第30図)。両墓の鳥居は長く不在であったが、今回再建することとなり、施工予定地の掘削にあたって、遺構・遺物の有無を確認するために平成10年11月2日から6日に立会調査を実施した。

掘削箇所は両墓とも鳥居基礎部分のみであり、縦4.0m、横2.0m、深さ1.6mである。層序は共通し、下記の通りである(第31図)。

- I層 表土。黒色砂質土、落葉等による腐植土。
- II層 埋戻土。暗茶褐色砂質土、前鳥居撤去後の埋戻土もしくは盛土。
- III層 地山。漸移層を含む、黄褐色砂質土。



第30図 磐衝別命墓・磐城別王墓調査箇所位置図(1/2000)

磐衝別命墓においては、このII層内より近代以降に属すると考えられる陶磁器片が出土した。磐城別王墓においても同様にII層から陶磁器片、及び旧鳥居の基礎に使用していたと思われる煉瓦・ボルトなどが出土した。いずれも遺構に伴うような出土状況ではなく、前鳥居撤去後に埋戻した際、混入したと考えられる。

結局、今回の調査箇所では古墳に関する遺構は存在しなかった。担任陵墓守部の話によれば、墓前が現状のように整備される以前(大正年間頃)は、周囲には民家が存在してい

たとのことであり、今回出土した陶磁器類もその当時の遺物と判断した。

今回の調査では古墳時代に遡る遺物も一切出土しなかった。磐衝別命墓、磐城別王墓については両墓をひとつの前方後円墳と見る指摘もあるが⁽¹⁾、今回はその是非を判断をすることができるといえるような所見は一切得られていない。隣接する本念寺の庭には、磐衝別命墓から出土したと伝えられる石材が庭石として用いられている。今回の調査時にその石を実見したが、古墳の石室に使